『日本語学論集』第２０号　２０２４年３月

琉球諸語の名詞「もの」由来の助詞の用法

―談話資料と文法記述資料から―

阪 上　健 夫

1　はじめに

日本語共通語の終助詞「もの」は、「絶対いや。早起きしたくないもの。」のように先行文脈の理由・根拠や聞き手に対する対抗・対立を表すとされる（日本語記述文法研究会 2003, 松下 2014, 小原 2016, 井島 2016）。その一方、琉球諸語では名詞「もの」由来の形式が文中で理由の接続助詞としても使われる。本稿では琉球諸語の名詞「もの」由来の助詞を「モノ」類として、談話資料と文法記述資料から用例を収集する。そのうえで、文中に使われる接続助詞の用法と、文末で聞き手への働きかけ等を表す終助詞の用法を整理する。資料が限られているため例がない用法は非文法的とまでは言えないが、「モノ」類がどのような意味用法で用いられるかを明らかにすることはできる。

本稿では 2 節で琉球諸語に関する先行研究に触れ、3 節で『全国方言資料』と『日本語諸方言コーパス（COJADS）』および文法記述資料から収集した「モノ」類の用例を示す。4 節では「モノ」類の用例分布を各言語別に整理し、5 節でまとめを行う。

2　琉球諸語に関する先行研究

2.1　琉球諸語の分類

東條（1953）は日本語を本土方言と琉球方言に二分している。さらに、琉球方言を奄美方言・沖縄方言・先島方言の 3 つに分けている。また、中本・中松（1984: 5）によると琉球方言は大きく北琉球方言と南琉球方言に分かれ、北琉球方言は奄美方言と沖縄方言に、南琉球方言は宮古方言・八重山方言・与那国方言に分かれる。ペラール（2013）も同様の分類を行っているが、琉球列島の言葉は本土のどの方言とも大きく異なり相互理解が不可能で、琉球列島の中でも言葉が通じない地域があるとする（p. 82-83）。そのため日本語を単一言語ではなく多様な「日琉語族」と見なしたうえで、「琉球諸語」を認めて上の 5 つの分岐群をそれぞれ独立した語としている。そして、同じ日琉諸語に属する

琉球諸語と日本語の間には数多くの語彙と文法上の対応関係が見出され、これらの言語が系統関係にあることを示しているとする（p. 84）。

2.2　琉球諸語における「モノ」類

中松（1984: 198）は琉球諸語で元々自立語であった munu, kutu などの体言が自立語としての機能の他に、特定の構文上の位置によって附属語としての機能を表すことがあるとしている。中本・中松（1984: 73）も琉球諸語で「から」「ので」に当たるものとして kutu を挙げている。また、国立国語研究所（1989, 1999）の『方言文法全国地図』を見ると、第 191 図「いた［よ］」では沖縄県で mo:itarumuŋ（名護市字名護）が回答されている。ここでは「モノ」類に当たる muŋ が終助詞として使われていると思われる。また、第 33 図「降っている［から］」でも ɸuirumuŋ（中頭郡北中城村字熱田）が回答されており、第 37 図「子どもな［ので］」でも warabidujarumuŋ（中頭郡読谷村字長浜）が見られる。琉球諸語では、名詞「もの」由来の助詞が理由の接続助詞としても使われているように見える。さらに、第 40 図「木を植えた［のに］（枯れてしまった）」においても中頭郡北中城村字熱田でʔi:te:tarumuŋ、名護市字名護でʔi:tarumunu:のような回答が見られる。

そして、国立国語研究所（2001）の『沖縄語辞典』は muN を「よ」「もの」「さ」のような意味の助詞として、ʔicurumuN（行くよ）、ʔikaNmuN（行かないさ）のように使われるとしている。これは終助詞の用法だが、接続形式としては文語で「ものを」「のに」「から・ので」といった意味の-munu や「…であるから」「…なので」を意味する-demunu を挙げている。また、内間・野原（2006）による『沖縄語辞典』は「ムン」を名詞「もの」に当たる「ムヌ」と同じ用法を持つとして、助詞の「ムン」もあるとしている。助詞の「ムン」には「よ」「さ」といった終助詞の用法と、「ものを」「のに」といった接続助詞の用法があるとして、「ムンヌ」は「ものを」に当たる接続助詞の用法を持つとしている。こういった「モノ」類には逆接の用法もある可能性がある。花薗（2020）による『初級沖縄語』は「ムンヌ」という形式を「から」と「のに」の両方の意味で使われることがあるとして、どちらになるかは文脈によって決まるとしている。

次節では、『全国方言資料』と『日本語諸方言コーパス（COJADS）』で琉球諸語の muN, munu, muNnu, muno, mono といった「モノ」類の用例を収集する。談話資料は文脈や意味の解釈が難しい場合があるため、文法記述資料の記述も参照して用例を引用する。具体的には文中に使われて主節事態を修飾・限定する節を導く接続助詞の用法と、文末に使われて聞き手への働きかけ等を表す終助詞の用法についてまとめる。

3　琉球諸語の「モノ」類の用例

用例収集の結果、琉球諸語の「モノ」類には理由の接続助詞に当たる用法が見られた。名詞「こと」由来と思われて同じく理由の接続助詞として使える kutu と比べると用例は少ないが、広い地域に見られる。理由の接続助詞の用法においては、日本語共通語の「から」相当の接続助詞と「のだから」相当の接続助詞との明確な区別がないように見える。その一方で、逆接の接続助詞に取れる用例もあった。また、文末で聞き手に発話内容を知らせる終助詞「よ」に訳せる用例も見られた。本稿ではトマ・ペラール（2013）等の分類に従い、琉球諸語を北から順に奄美語・沖縄語・宮古語・八重山語・与那国語に分け、この順に「モノ」類の例を示す。

3.1　理由の接続助詞の用法

まず、奄美語徳之島方言では muNnat'i という形式に『全国方言資料』で「から」と訳せる理由の接続助詞の用例が見られた。（1a）は浜下りの話である。

(1)a.

m: n'aNbënu　cj'iRnï　'uri　sï　zïsï　nïsïti　k'uri　cj'aNte…
いまごろの　人に　それを　して　ぜひ　見せて　くれ　といっても,…[1]
kikija　'aramuNnat'i　madu　fuïziNgarï
聞き入れは　しないので,　暇のあるとき　ふだんでも
zïsï　saNma　sïmaN　cju　nanïkanu　kjuNdukiNdu　'aNnu
ぜひ　しなければ　ならない　という　なにかが　来る時　であるが。

収録 1965 年 m: 1883 年生

［『全国方言資料』10 巻　鹿児島県大島郡徳之島町亀津南区］

b.

f: n'aNbëgarï　'ïsasamanu　t'aRmuNnat'i[2]　mazïmuNkjanï　kw'aQt'aNte
今ごろは　お医者さまが　いいから,　ハブなどに　かまれても
'ugasaNgë　'ïcjamïmaseRraNcïjo
そんなには　ひどくなりませんよ。

収録 1965 年 f: 1886 年生

［『全国方言資料』10 巻　鹿児島県大島郡徳之島町亀津南区］

[1] テキストと日本語共通語訳は基本的に出典のままにしている。
[2] jut'aRmuNnat'i が正しいが、ju-は聞き取れないという注がある。

c.

m: ’oR　tuNgë…　nëmuNnat’i…　’uitamuN　kaïcïjoR

はい。　鍬が…　ないから…　あなたがたのものを　借りましたよ。

収録 1965 年 m: 1891 年生

［『全国方言資料』10 巻　鹿児島県大島郡徳之島町亀津南区］

d.

f: kw’aRnu　namaija　nuQc　cïkïtïka　jut’aNgaja

子供の　名前は　なんと　つけたら　よろしいかね。

m: ’urija　sanbasaNnï　’uNcj’unu　cïkïrumuNnat’i　’uNnï　makacïka　t’aijo

それは　産婆さんに，その人が　つけるから，　その人に　まかせたら　いいよ

収録 1965 年 m: 1891 年生, f: 1888 年生

［『全国方言資料』10 巻　鹿児島県大島郡徳之島町亀津南区］

加えて、（2）のように聞き手に発話内容の認識を促す文末用法も見られた。これはハブの話である。

(2)f: cj’uRnu　’ari　’ïNk’asjuNkïdu　’anu　mokokac’ï　’udutï

人が　あれを　動かすから　であって，　むこうから　おどりかかって

kiRja　’aramuNnat’ija　cj’u　k’uigaja

来ることは　ないからね，　人を　かみつきに。

収録 1965 年 f: 1886 年生

［『全国方言資料』10 巻　鹿児島県大島郡徳之島町亀津南区］

こういった文末用法は日本語共通語の「から」にもある。白川（2009: 167）はこのような「から」の文末用法を、話し手と聞き手の間の認識のギャップを埋める意図を明示するものとしている。（2）の例もそれに当たると思われる。加えて、内間（1994: 273）も（3）のような奄美語徳之島方言で「ムンナティ」が使われる例を挙げている。

(3)シゥニゥヌ　ヤミュムンナティ　あッカライ

足が　痛いので　歩けない（内間 1994: 273）

内間（1994: 273）は奄美語徳之島方言で「ムンナティ」と「ムンマ」があらわれ、「ムンナティ」は理由で「ムンマ」は逆接という区別がされているとする。しかし、『全国方言資料』には奄美語徳之島方言で muN が理由の接続助詞として使われる例も見られる。

(4) のようなものである。

(4)m: n’aR　sïrïkac’ï　jusït’uga　wuRmuN　’umac’ï…　’izïkuNma
さあ　白井に　よし[3]が　いるから,　そこまで…　行って来なければ
simaNcï　’ëRt’aQtu…
ならないと　言いましたので…

収録 1965 年 m: 1891 年生
［『全国方言資料』10 巻　鹿児島県大島郡徳之島町亀津南区］

また、沖縄語の muN, munu, muNnu も（5）のように理由の接続助詞の例が見られた。

(5)a.
m: ’aha　toR　waNneR　bicikaiN　erbiRrumuN…
では　わたしは　よそへ　行く　ところですから、…
mata　’iRtuma　sabiRa…
また　おいとま　いたしましょう。…
f2: ’aNseR　naR　mata　kurasinuN　natoRrumuN…
それでは　まあ　また　暗くも　なっているから…
sigu　’iciRneR　hwisahagoRsanu　habuNdeRnu
すぐ　行くときは　気味悪くて　蛇などが
uineR…　naraNmuN　cjoRciN　cikiti　’ikeR
いたら…　いけないから　ちょうちんを　つけて　行け。

収録 1953 年 m: 1891 年生, f2: 1888 年生
［『全国方言資料』10 巻　沖縄県那覇市首里（旧首里市）］

b.
f1: saNzjuRgoeN　jasiga　’jaRNkaija　saNzjuRensi　’uisa
35 円　だが　あなたには　30 円で　売るよ。
f3: toR　’aNseR　kure　iQpeR　iRN
まあ　それなら　これは　たいそう　いい。
’anuR　zjoRtuR　eRrumuN　’anu　tiRceR　’umiseRbireR
あの　上等　だから　あの　1 枚は　売ってください。

収録 1953 年 f1: 1883 年生, f3: 1889 年生
［『全国方言資料』10 巻　沖縄県那覇市首里（旧首里市）］

[3] 人名であるとの注がある。

c.

m: hai　'aNmaR　pit'u　ri　j'uRsugaR
さあ　おかあさん　イルカ　と　言うが。（イルカ漁）

f: 'age　hak'u　'iziNseRraNk'ineRjaR
やあ!　早く　出なければならないよ。

m: …'aN　seRnaRjaR…　kw'anukj'aN　p'uroRni　'uinumunu　juwaNnaR
…そう　しなければね。…子供たちも　畑に　いるから　呼びなさい。

収録 1967 年[4]m: 1886 年生, f: 1885 年生

［『全国方言資料』10 巻　沖縄県（北部地区）名護町城］

d.

f: ciaNnuN　wahasaba　nudi　'icjiba…
お茶なども　沸かすから　飲んで　行きなさい…

marikeRtidu　jarumunuR　juhut'i　'iciba
たまのこと　だから,　休んで　行きなさい。

収録 1970 年 f: 1903 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県伊江村東江と川平（伊江島）］

e.

f: 'umici　'imeNθakoR　'ijugwaR　nisaNginoR　cjuRmoN　θabiRkutu
海へ　いらっしゃるなら　魚を　2, 3 斤は　注文　しますから,

muQcici　θurasiN　θoRriQciri　eRbiNtaru
持って来て　ください　といって　です。

m: 'aNcija…　'ikaNmuNnu　naR　'atura　hoRjaRθa　naR
それでは…　行かないから　まあ　あとから　来いね。　では。

収録 1968 年 m: 1892 年生, f: 1904 年生

［『全国方言資料』10 巻　沖縄県（南部地区）知念村久高］

f.

m: naR　nuRhuiN　kwaQciN　cjaRN　nuReR…
まあ。　いろいろ　ごちそうになり　お茶も　飲んだし。…

naR　niQka　nati　naRmuNnu　naR　'acjaR　huRjaR
もう　おそく　なって　しまったから,　まあ　あした　来ようね。

収録 1968 年 m: 1892 年生

［『全国方言資料』10 巻　沖縄県（南部地区）知念村久高］

---

4 原典では収録年が 1697 年となっていたが、これは現実的でないため話者の生年を考慮して 1967 年の間違いと判断した。

また、(6) のように引用の「と」に当たる ri に後接する例も見られた。「と言うから」と訳されているが、「言う」には j'uʀsu という形式が用いられている。

(6)m: kuʀja　kamizjaʀga　wakari　rimunuʀjaʀ…
今日は　カメさんの　別れと　言うからね。…
'iziʀ　maɴna　hanek'aci　kaʀnaʀ
行って　一緒に　にぎやかに　しようじゃないか。
f: 'aɴsajaʀ　kuʀ　wakari　rimunuʀ
そうしようね。今日　別れ　と言うから
'umisik'i　sugu　hanek'ahaɴk'ineʀ　naraɴdoʀ
大いに　うんと　にぎやかにしなければ　ならないよ。
収録 1967 年 m: 1886 年生, f: 1885 年生
[『全国方言資料』10 巻　沖縄県（北部地区）名護町城]

内間（1984: 216）は現在の琉球諸語で mun, mu は「～であるから」などの意味で助詞的に用いられるとして、(7) のような沖縄語の例を挙げている。

(7)ʔari　ga　wui(ru)　mun　ʃimu:　sa
あれ　が　居る　から　いい　よ（内間 1984: 217）

これは (8) のように終助詞的にも用いられるが、その場合にも (8a) なら「イイデス」、(8b) なら「ジャマシテハイケナイ」といった含みがあるとしている。

(8)a. watta:　n　ʔai　mu
私たち　も　ある　から
b. tʃu:　nu　wui　mu
お客さん　が　いる　から（内間 1984: 217）

この「モノ」類は琉歌・組踊といった文献資料でも理由の意味で用いられていて、終助詞的に用いられても常にその後に含みがあるとする（p. 218）。『全国方言資料』の沖縄語の例にも理由の接続助詞の文末用法と思われるものがある。(9) の例は前の発話の理由を述べているため、「小使だったよ。一番年下だったものね。」としても自然である。

(9)f: 'aɴseʀ　naʀja　'amaɴzja　kuigeʀ　raibiʀtarujaʀ

それでは　あなたは　あちらへ行っては　小使　でしたか。

m: kuigeR

小使。

f: ’aQhaR　kuigeR　zjoRri

ああ（なるほど）　小使。　上手だ。

m: ’iQciga　’uQturamunja　wanja　zjuRguru　naiti

いちばん　年下だからね　わたしは　15 才　でして。

収録 1968 年 m: 1892 年生, f: 1904 年生

［『全国方言資料』10 巻　沖縄県（南部地区）知念村久高］

このような例を見ると、先行文脈の理由を述べる文末の「もの」には、先行する文の理由を述べる接続助詞「から」の文末用法との連続性が見える。

また、仲原（2007）によると、沖縄語首里方言では「クトゥ」が理由の接続助詞として最も使用されている。一方、名詞や形状詞の語幹に接続する場合は（10）のように「ムヌ」も現れるとする。

(10)a. メーナチ　アミ（ヤクトゥ／デムヌ）　アレームノー　カーラカン。
毎日　雨だから、　洗濯物は　乾かない。

b. クヌジャシチェー　シジカ（ヤクトゥ／デムヌ）　シクチェー　ユー　ナイン。
この部屋は　静かだから、　仕事は　よく　できる。

c. ワラビ（ヤクトゥ／デムヌ）　ワカランタン。
子どもだから、　わからなかった。（仲原 2007）

加えて、八重山語石垣方言には(11)のように「もの」と日本語共通語訳されているが、次の節と一続きなら「から」とした方がいい例もある。これは町に繭を売りに行く話で、munu の節が次の節の理由を述べているとも取れる。

(11)m: meRma　kaNgaJ　miRda　baRja　huNto　soRtoR
今　考えて　みた　ときは　本当に　本当に

paR　kuroRde　’aNnu　munu　paR　naNkïdï　’ani
私たちの　苦労で　ある　もの,　私たちの　難儀と　いう

munoR　pïtoR　sïsaRnugajaRdidu　’umuriNra
ものは,　人は　わからないんじゃないかと　思われるね。

収録 1968 年 m: 1893 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県石垣市川平（石垣島）］

このような例を見ても、日本語共通語の終助詞「もの」と接続助詞「から」の用法は理由を表すという点で連続しているように思われる。

3.2　理由の「のだから」に当たる用法

続いて、沖縄語の「モノ」類の文中の用法には日本語共通語の「のだから」に当たるものも見られた。「のだから」は「から」と振舞いが異なる。田野村（1990: 104）は「のだから」節の内容は疑念の余地なく定まった事柄として提示され、聞き手が既に知っている事柄のことが多く、知っていて当然という印象があるとする。そして主節は従属節を踏まえれば当然といった意味を込めて提示されるとしている（p. 107-108）。野田（1997: 5 章）によると「のだから」は単なる事実描写には用いられず、主節は判断や命令・依頼・意志などに限られる。従属節には聞き手が知っているはずだが十分に認識していないと話し手が見なす事態が現れ、十分認識するよう促す。そのため、主節の判断は必然的というニュアンスがある。岩崎（1996）はこの主節の制限に例外があるとして、従属節に評価を表す副詞があれば主節が 1 人称主語の場合事実描写でも可能とする。ここから、「のだから」節は基本的に話し手の評価といったモダリティ的態度の根拠を表すとしている。日本語記述文法研究会（2008: 130-133）も「のだから」は従属節の事態を確かな事実として示し、そこから必然的に導き出されるものとして主節の事態を示すが、主節には評価の表現も現れるとする。（12）の例がこういった用法に当たる。

(12)a.

f: eRbiRθiga　’up’usju　’ure　’ukusja　eRbiRθajaR
ですが　おじいさん　それは　おかしい　ですね。

m: θiminbaRru　panasiranmunnu
それでいいのだ。　話なんだから。（結婚の話）

収録 1968 年 m: 1892 年生, f: 1904 年生
［『全国方言資料』10 巻　沖縄県（南部地区）知念村久高］

b.

m: nihweR　jaQc’aR　nj’anma　’icunaRsanu　janka’i　’icjaiR
ありがとう　ございます。　今　忙しいから,　家に　帰ります。

f: ’aiR　’iQc’ut’eR　maQt’iR　marimariRt’u　cjuRrumunoR
いやいや,　ちょっと　待って　たまに　来たんだから,

収録 1970 年 m: 1922 年生, f: 1903 年生
［『全国方言資料』11 巻　沖縄県伊江村東江と川平（伊江島）］

（12a）は主節で判断を述べており、（12b）は主節が「ちょっと待って（ゆっくりしていって）」という依頼となっている。これらは「のだから」が自然だと思われる。また、次の（13）の例は「のだ」と訳されているが、前の文の根拠を述べる「のだから」の倒置用法とも取れる[5]。猟の話で、ペークチャーはふかの一種である。

(13)m: ’aNsjaR　toRtoR　moR　sikataR　naraN…　p’eRkucjaR
それで　とうとう　まあ　仕方　なく…　ペークチャーを
moR　piNgaceR…　cjaN　basjuN　’ataɲjoR…
まあ　逃がして…　悔しがった　時も　あったよ。…
f: ’aNθiru　p’eRkucjaRja　θujabiraNtaɲjaR
あんなにして　ペークチャーは　とったんですか。
m: θuija　piNgaci　’aNci　neRmuNnu
捕れるものか,　逃がして　それで　ないのだ。
収録 1968 年 m: 1892 年生, f: 1904 年生
［『全国方言資料』10 巻　沖縄県（南部地区）知念村久高］

この muNnu は「のだから」に当たるもので、当該の文は「逃がしてしまってペークチャーがいないのだから、捕れるわけがない」という意味ではないだろうか。ここで（5e, f）と（12a）の知念村の例を比べると、muNnu が「から」にも「のだから」にも使われていることが分かる。また仲原（2007）は、沖縄語首里方言の「のだから」に当たる形式として（14）のように「ムンヌ」が使われるとしている。

(14)a. クングトゥ　（チバテークトゥ／チバテールムンヌ）
こんなに　頑張った（から／んだから）、
エーディン　クンドー　ディキトーラハジ。
きっと　今度は　できているはずだ。
b. カンヌーナ　ハナシ（ソークトゥ／ソールムンヌ）
大事な　話をしている（から／んだから）、
ワラベー　アマンカイ　ッンジョーケー。

5 （12a）にもあるように日本語共通語の「のだ」に当たる形式としては NbaR が使われている。muNnu が「のだ」に相当するわけではないと思われる。

子どもは　あっちへ　行ってなさい。

c. ジカノー　ナーダ　ジューブン　（アクトゥ／アルムンヌ）

時間は　まだ　十分　あるんだから、

ヨーンナー　ユクティッンジクィレー。

ゆっくり休んでいってくれ。（仲原 2007）

この例を（10）と比べると「から」は「ムヌ」で「のだから」は「ムンヌ」と区別されているように見えるが、（14）でも（10）と同様に「クトゥ」が使われている。

そして、八重山語石垣方言にも「のだから」に当たると思われる例が見られた。（15）の例は不祝儀の挨拶の場面で、「以上は」となっているが「のだから」でも自然となる。

(15)f: waR　'unïsjukï　sïtarï　ka'iN　neRnu　meR

あなたが　こう　した　かいも　なく　ね

kaNzi　sïNde　siraride　Ngï　'aNzi　narirï

このように　なくなったと　いって,　こう　なった

munoRja　noRdu　jarja

以上は　どうしようもない,

収録 1968 年 f: 1891 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県石垣市登野城（石垣島）］

日本語記述文法研究会（2008: 130-132）は「以上」も「のだから」と同様に従属節の事態を確かな事実として示し、そこから必然的に導き出されるものとして主節の事態を示すとしている。このため、（15）では「モノ」類が「のだから」のような意味用法で使われているとも考えられる。

こういった例を踏まえると、琉球諸語では「から」と「のだから」に対応する形式の区別が明確でない可能性がある。

3.3　逆接の接続助詞の用法

これまでは理由の接続助詞の用例を挙げてきたが、琉球諸語の「モノ」類には逆接の接続助詞の用法も見られる。白田（2013）は奄美語喜界島小野津方言の談話資料として（16）の例を挙げている。「モノ」類が「のに」という逆接の意味で使われていることが伺える。ハサームッチーは葉餅のことである。

(16)A: hasaamuccii　siija　baadoocci　umuarii

ハサームッチーを　作るのは　嫌だって　思ってしまう

A: assi　zjanmun　jo　mata　sun　dukjee　jo　mata　zjembunji

それ　なのに　ね　また　する　時は　ね　また　全部に

atiti　jo　maziinji

当てて　ね　同じように

B: …weebusa　jaa

…分けたいの　よね

A: in　sii　dikiran　cuŋkjaanji　jo…

ええ　できない　人たちに　ね…

B: zjanmun　njamanu…　waasan　k'waŋkjaaja…

なのに　今の…　若い　子たちは…

A: akii　kamandooa

食べないよ

B: kjassikacci　umui　jo

どうかなと　思う　よ（白田2013: 280-282）

また3.1でも触れたが、内間（1994: 273）は奄美語徳之島方言で「ムンマ」が逆接を表すとする。奄美語沖永良部島方言では「ムンヌ」が使われるとして、(17）のような例を挙げている。

(17)a. カキュムンマ　カキバーッチゥ　ゆーイ

書くのに　書かないと　いう【徳之島方言】

b. ハキュムンヌ　ハカムディ　ゆーン

書くのに　書かないと　いう【沖永良部島方言】（内間 1994: 273）

そして沖縄語では「ムンヌ」が逆接を表すとして、(18）のような例を挙げている。

(18)ケーヌムンヌ　カーンリ　ゆーン

食べるのに　食べないと　いう（内間1994: 274）

内間（1984: 216）は琉球諸語の「モノ」類は「〜なのに」という意味でも用いられるとして、(19）のような沖縄語の例を挙げている。

(19)a. katʃumuɴnu　nuːNtʃi　kakaNtʃi　ʔitʃaga

書くのに　なぜ　書かないと　言ったか（内間1984: 413）

b. takaʃe:muNnu　jaʃʃeNri　ʔjuNna

高いのに　安いと　いうか（内間 1984: 582）

沖縄語で muNnu が日本語共通語の「のに」に当たる逆接の意味で使われるとすれば、逆接の接続助詞が（5e, f）の例にもあった理由の接続助詞と同じ形式ということになる。『全国方言資料』でも（20）のように、沖縄語で「モノ」類が逆接の接続助詞として使われる例が見られた。

(20)a.

f3: nuRNci　'uNzjoR　'aNsi　deNkinu　'aini　keRti

なぜ　あなたは　それでは　電燈の　ついているうちに　帰って

m'eNseRNdi　'irumuN…　zikaN　'usuku　keRti　meNsoRcjaga

いらっしゃると　言ったのに…　時間　おそく　帰って いらっしゃったか。

収録 1953 年 f3: 1889 年生

［『全国方言資料』10 巻　沖縄県那覇市首里（旧首里市）］

b.

m: cjataNnu　taNmeRja　noRmiseRbiraNteRsajaR

北谷の　おじいさんは　おなおりにならなかったんですね。

f3: 'iQtucinaR　hanasici　kakajaRni…　noRjuRsimiseRbiraNtaNdoRjaR

ちょっとした　かぜを　ひいて…　おなおりにならなかったんでよ。

m: namamadeR…　'ugaNzjuR　simisoRreR　'iQpeR　'umaganucjaRgaN

いままでは…　元気で　いらっしゃったら　たいそう　お孫さんたち

NnasiN　takara　jamiseRbiRtarumuN…　'usiRkutu　eRbiRsaR

みんなの　たから　でいらっしゃいましたのに…　おしいことで　ございます。

収録 1953 年 m: 1891 年生, f3: 1889 年生

［『全国方言資料』10 巻　沖縄県那覇市首里（旧首里市）］

c.

m: sjuRru　cjaruR

きょう　帰って来た。

f: 'ai　nuRga　naRja　saNnici　cimunu

ああ　なぜ　あなたは　3 日の間だと　いうのに

'un　naginaR　nati　'imeRga

こんなに　ながらく　なってから　いらっしゃるのですか。

収録 1968 年 m: 1892 年生, f: 1904 年生
［『全国方言資料』10 巻　沖縄県（南部地区）知念村久高］

沖縄語の「モノ」類は（5）のように理由の接続助詞としても使われるが、同様に理由の接続助詞の用法を持つ kutu には管見の限り逆接の用例は見つからない。こういった「コト」類は内間（1994）や内間・新垣（2000）でも理由の接続助詞とされている。国立国語研究所（2001）の『沖縄語辞典』や内間・野原（2006）の『沖縄語辞典』でも理由を表すとされ、逆接の意味があるとする記述は見られない。沖縄語の「モノ」類は「コト」類と比べると理由の接続助詞の意味が希薄で、文脈によっては逆接にもなるものと思われる。

ただ、沖縄語伊平屋方言と沖縄語具志川方言では、接続助詞の「モノ」類に（21）のような逆接の意味の用例しか見られなかった。（21a）は出かけて帰ってきた際の家族との会話で、「鼻を持ち上げて」は「馬鹿面をして」という意味である。

(21)a.

m: nobuonu　meNkenu　naRgimuN…　saRtaR　'irie　teNtarumunu
信雄の　所への　お土産物に…　砂糖を　入れる　と言ったのに,
wasirie　'irieneRna　waN　nobuomeRke　hana　mucjageR　'NzamunaR
忘れて,　入れなくて　私は　信雄の所に　鼻を　持ち上げて 行ったものだ[6]。

収録 1971 年 m: 1910 年生
［『全国方言資料』11 巻　沖縄県伊平屋村我喜屋（伊平屋島）］

b.

m1: naR　kuNdu　naRfakeN…　'uNcikeR　'uganeR　'NzeRkaneR…　bjoRiNnu
もう　今度　那覇に…　お連れ　申して　いらっしゃってから…　病院の
'isagakeR　sabitarumunoR…　tusinu　saiga　jabitaraR…
医者に　おかかりになりましたのに,…　年の　せい　だったのか,…
kunu　juN　'usinaeR…　muru　gusiNpai　siNheR　herumuNnaRsai
おなくなりになって[7]…　皆　御心配　なさった　ですね。

収録 1971 年 m1: 1910 年生
［『全国方言資料』11 巻　沖縄県伊平屋村我喜屋（伊平屋島）］

---

6 「モノ」類はこの例にあるような日本語共通語の「ものだ」に相当する形式にも関わると思われる。しかし日本語共通語で「ものだ」は助動詞であり終助詞の「もの」とは区別されているため、本稿で「ものだ」相当の形式は扱わない。

7 この例は「おなくなりになって」と訳されているが、「この世を失って」という意味だと注釈で解説されている。

c.

m1: naRhiN　gaNzuRha　semeheRruwa　kwaRmagaNcjaN　sidasikiN…

もっと長く　丈夫で　いらっしゃったら　子や孫たちの　世話も…

’uri　jabitarumunoR…　tusinu　saigata…

それ　でありましたのに,…　年の　せいだったのか,…

kunu　juRneR　makieRnaR

この　世には　負けて

収録 1971 年 m1: 1910 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県伊平屋村我喜屋（伊平屋島）］

d.

f: caRbira　toRhu　koR’ibira

ごめん下さい。　豆腐を　下さい（買いましょう）。

m: naRhwiNgwaR　heRku　ciRneR　’ataru<u>munnu</u>　daR　naR

もう少し　早く　来れば,　あったものを,　それ　もう

jaRga　zikaN　kiQci　neRraNseR

あなたが　おそく　来たから　ないよ。

収録 1968 年 m: 1883 年生, f: 1922 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県具志川村仲泊（久米島）］

こういった用例の分布には地域差が見られる可能性がある。カルリノ（2019: 96）は、沖縄語伊平屋方言のmunは接続助詞としては逆接を表すとして（22）のような例を挙げている。理由節はtuで表すとする（p. 305）。これは「コト」類に相当すると思われる。

(22)dee　takaku　uraritanu　<u>mun</u>

値段　高く　売れた　<u>のに</u>。（カルリノ2019: 96）

加えて、沖縄語の逆接を表す「モノ」類には（23）のような文末用法も見られた。

(23)a.

f: kiR　waQtaR　’uRziNgwaR　toRsabiRsiga　’uNzu　’iRmaRruR

今日　私たちは　砂糖きびを　倒しますが,　あなたも　共同作業

soRti　kwimisoRraNgajaR

して　下さいませんかね。

m: naR　tusi　tuQti　naR　na’igajaR　sige

もう　年を　とって　もう　できるだろうかね，　シゲさん。

f: ’aR　’uNzu　namamadeR　wakamunucaRjaka　masi　deRbiRmunu

いや，あなたは　今までは　若者たちよりも　よく　できましたのに。

m: ’iR　namamadeR　naR　taRnu　’abusikara　NnigwaR　kati

ええ。　今までは　もう　田の　あぜから　稲を　刈って，

katamiti　’aracai　naR　waQtaRkaraja　guRsaN　cici

背負って，　歩いたり，　もう　わたしたちからは　杖を　ついて

’aracuru　tusibeR　deRs;ga　’aNsi　kana’iRrusuNroRjaR

歩く　年配　なんだが，　こんなに　仕事ができるよね。

f: ’uNzoR…　’uRzi　kaQsaRzeR…

あなたは…　砂糖きびの葉を　落とすのは…

wakamuNnucaR’ukaR　zoRzideR　biRmuNnu

若者たちよりは　上手　なのに。

収録 1968 年 m: 1883 年生, f: 1922 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県具志川村仲泊（久米島）］

b.

f: taNmeRja　noRijuRsabijaNteR　bihajaR

おじいさんは　（お）なおりになれなかったん　ですね。

m: ’iR　seQkaku　hataraci　joRzocoRsiga　noRjuhaNtaNroRjaR

ええ　せいぜい　骨折って　看病したのだが，　なおりはしなかったよ。

f: naNzimaNguraR　muduimisoRQcaga

何時ごろに　昇天なさいましたか。

m: ’a　’asanu　gozini　muduimisoRcaNdoRjaR

ああ，　朝の　5 時に　昇天しましたよ。

f: ’ahaR　naR　’aQciR　gaNnzu　Qcu　jamiseRtarumuNjaR

ああ，　まあ　あんなに　元気な　人　でしたのにねぇ。

収録 1968 年 m: 1883 年生, f: 1922 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県具志川村仲泊（久米島）］

内間・新垣（2000）も沖縄語の「モノ」類は接続助詞としては「のに」「ものを」に当たる逆接を表し、文末用法は不平・不満を込めた言いさしになるとして、（24）のような例を挙げている。

(24)a. ʔuraja　wassa:rumun

君が　　悪いのに（内間・新垣 2000: 202）

b. ʔuppimare:　　jumiju:surumun

これくらいは　　読めるものを（内間・新垣 2000: 231）

c. ʔure:　　magisarurumun

これは　　大きいのに（内間・新垣 2000: 248）

加えて宮古語平良方言でも、接続助詞の「モノ」類には（25）のような逆接の意味の用例しか見られなかった[8]。

(25)a.

m: sukatu　mme　'ureR　'junumunu　'uNsuku　tikasi…　munuR'i…

しかし　もう　それは　よろしい。　そんなに　成功して…　いるのに…

mme　uriNku'inu…　'iR　kutu　neRnnipa…

もう　これ以上の…　いい　ことは　ないから…

収録 1969 年 m: 1903 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県平良市大神（宮古群島大神島）］

b.

f: kanaka'i'ja…　mma'uma'i　'ü'a'umai　sutata'uma'i…　'uturuskaripatu…

昔は…　母をも　父をも　兄たちをも…　こわがっていたから…

kanu　mmata　'ü'ataka　'a'ükaneRn…　sutatiRra'itaka　naran

あの　母たち　父たちが　言う通り…　結婚しなければ　ならない

paRnu　'ari　na'utitu　v'aR…　'umu'i　'utarapaR…

事情が　あって　どうして　あなたは…　思って　いたならば,…

'antaka　mmata　'ü'taNka'i　'jaraRma'i　kisi…　panas'u　'a'ütikaR

私たちの　母たち　父たちに　でも　来て…　話を　したら

kanu　'antaka　mmataR　'ü'ataR　sutataR　'junumunu　tiR

あの　私たちの　母たち　父たち　兄たちは　よろしい　と

'a'üta'ü　munu　v'aR　'aNsi　kaNsinu　paRja　neRta…

言った　のに,　あなたは　あんな　こんなの　ことが　なくて…

収録 1969 年 f: 1908 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県平良市大神（宮古群島大神島）］

---

8 法政大学沖縄文化研究所（1977: 175-176）は宮古語の理由の接続助詞として「モノ」類の例を挙げておらず、tu の例を挙げている。これも「コト」類に相当すると思われる。

八重山語石垣方言でも（26）のように「モノ」類が逆接で用いられる例が見られる。

(26)f: juQkuri　sisiti　’oriba　misjaru　munu　nodi　’u’aja
ゆっくり　して　いらっしゃれば　よい　のに　なぜ　あなたは
’awati　’oRruNdi　kaNgaJ　’oRrirjaR　hiQzjaR
あわてて　いこうと　考えて　いらっしゃるのか,　にいさん。

収録 1968 年 f: 1892 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県石垣市川平（石垣島）］

内間（1994: 274）は八重山語石垣方言で「ムンバ」が現れるが、「ムン」もあるとして、（27）のような例を挙げている。八重山語波照間方言では「ムヌ」があるとする。

(27)a. カクムンバ　カカヌディドゥ　アンク
書くのに　書かないと　いう【八重山語石垣方言】
b. ハクムヌ　ハカヌタ　エヌン
書くのに　書かないと　いう【八重山語波照間方言】(内間 1994: 274)

加えて、八重山語竹富方言では逆接を表す「モノ」類の文末用法に当たる例も見られた。（28）の例では直後に読点が付いているが、接続詞「そんなら」が続いていて内容的にも「のに」で文が終止していると判断した。

(28)f: beRbi　jasïkaR　’obiR　jabaN　’utamaNzimu…　katamaR　’oritaborijoR
少しですが,　これだけ　でも　子供たちに…　持って　いらっしゃい。
m: ’oR　nipajuR　cjaR　datë　’e’oraNci
はい。　ありがとう　ね。　あなた　そんなになさらなくても
misjarumunuR　’esjacjaRmaR　situ　si　NgiR…
よろしいのに,　そんなら　おみやげに　して　行って…
sanisjaR　sumosuN　maR
喜ばせて　やりましょう　ね。

収録 1969 年 m: 1904 年生, f: 1906 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県竹富町波照間（波照間島）］

ここで、逆接の「モノ」類が全ての例で「のに」「ものを」で訳されている点に注目すべきである。「モノ」類が「けど」「が」で訳されている例は見つからない。今尾（1993:

75）は日本語共通語の「のに」を主観性の強い接続形式としている。「のに」は話者の予測・期待と異なる事態が生じたことへの驚き・意外感・不満を表すとされている（前田 1995: 105, 原田 1998: 79, 日本語記述文法研究会 2008: 157）。日本語記述文法研究会（2008: 161）は「ものを」も話し手の不満・残念さを表すものとしている。また、「せっかく先生の家へ行ったのに、残念だ。」のように「のに」節の主節に話者の事態への感情・判断・評価が直接現れることもある（前田 1995: 107, 原田 1997: 58, 日本語記述文法研究会 2008: 157）。今尾（1993: 82）はこのような例では「のに」節の内容と対立する事態が先行文脈か話し手の意識の中に存在するとして、原田（1998: 80）はこういった「のに」を「けど」に置き換えられないとしている。琉球諸語の「モノ」類でも同様の例はあり、沖縄語の（20b）の例が該当する。（29）に再掲する。

(29)【(20)b. 再掲】

m: namamadeR… ’ugaNzjuR simisoRreR ’iQpeR ’umaganucjaRgaN
いままでは… 元気で いらっしゃったら たいそう お孫さんたち
NnasiN takara jamiseRbiRtarumuN… ’usiRkutu eRbiRsaR
みんなの たから でいらっしゃいましたのに… おしいことで ございます。

また、日本語記述文法研究会（2008: 157）は「のに」について、「けど」「が」と異なって「顔色が悪いけど、どうかしたの?」のような前置きの用法はないとしている。前置きの用法には予想外の事態への意外感・不満といった意味がないため、そのような意味を常に持つ「のに」は使えないものと思われる。琉球諸語の「モノ」類にもこのような前置きの意味で使われている例は見られない。こういったことから、「モノ」類の逆接の接続助詞の用法は日本語共通語の「のに」や「ものを」に近い可能性がある。

3.4 終助詞「もの」「よ」に当たる用法

最後に、「モノ」類が文末で聞き手への働きかけ等を表す終助詞として用いられている例を挙げる。白田（2013）は奄美語喜界島小野津方言の mun が文末に使われる例として（30）のようなものを挙げている。（30a）は葉餅の話題である。

(30)a. A: mata saŋŋacoo jaa… usikkunu tami jo
また 三月は ね… お節句の ため よ
saŋŋansancinu onnnanu usikku… cukuikudi
三月三日の 女の お節句… 作り置きして
B: …wannaja ikkai siriba… najusoo jaa

…私たちは　一回　すれば…　済むの　ね
A: ikkwai　si　jo　njaa…　siee　mindoo　zjanmun
一回　して　ね　もう…　するのは　面倒　だもの
B: mindoo　jaa…
面倒　ね…（白田 2013: 280-282）
b. teepuunu…　atuŋkjacciba…　paaŋa　jariti…
台風の…　後なんかは…　葉っぱが　破れて…
zjaahii　pjiuuti　akkanmun
あちこち　拾って　歩かないといけない（白田 2013: 273）

（30a）の例は日本語共通語の「もの」に置き換えられるもので、先行文脈で述べられている内容の理由や根拠を表していると言える。3.1 でも述べたように、こういった「もの」は先行する文の理由を述べる接続助詞「から」の文末用法と連続しているように見える。その一方で、（30b）は日本語共通語の「もの」が使いにくい。この例の日本語共通語訳では終助詞がないが、「拾って歩かないといけないよ。」のように聞き手に発話内容を伝える意味で mun が用いられているように見える。

また、カルリノ（2019: 330）は（31）のように沖縄語伊平屋方言の mun が終助詞として使われる例を挙げている。これは先行文脈の内容の根拠を述べる例である。

(31)B: Xnu　meenu　mizi　wačunu　meenu　waabiga　hanta　jajo
Xの　ところの　水が　湧く　ところの　上が　高台　だよ
B: mizi　ain　meejo…
水　ある　ところよ…
C: nama　unu　<dain>　amahee
今　その　ラインが　あるんだろう
ičazičike　agatanu　bani　ihigwa　anu
いちゃじに　上がった　ときに　少し　あの
harunu　ato　atan　munja
畑の　跡が　あった　ものね（カルリノ2019: 330）

加えて、『全国方言資料』には（32）のような沖縄語の例がある。（32a）の二番目の例や（32b）は先行文脈の根拠というより話し手の感覚や思考を知らせているので、日本語共通語の「よ」が自然となる。

(32)a.

m2: haJ　haRmeR　keRtiQcjasiga
おい　おばあさん。　帰って来たが。
f: heRtabireR　husumeR　kweRturumuNna　husumeR
早旅だったね，　おじいさん。　お変わりなくて[9]，　おじいさん。
m2: …kuNroR　jaRga　iRNneR　Qsi　sakigwaRja　suRJsaNjoRJ
…今度は　おまえが　言ったように　酒は　過ごさないように
cjuRJsaRJ　naR　numaN　natakutu　zinuN　moRkijaQcjaJ
注意して　もう　飲まないように　なったから，お金も　もうけやすく，
mata　sakiN　numaNtakutu　kweRtuNroR　haRmeR
また　酒も　飲まなかったので　ふとったよ，　おばあさん。
f: aR　Ncja　husumeR　kaRgeR…　moRkiti　kuru　kaRgireRmuN
なるほど　おじいさんの　顔は…　もうけて　来ている　顔をしているよ。
m2: jarajaR
そうだろう。

収録 1953 年 m2: 1891 年生, f: 1882 年生
［『全国方言資料』10 巻　沖縄県（南部地区）糸満町］

b.（昔の船旅の話）
m: namaR　tu…　kurabiRneR　namanu　cjuja…　deRzina　heRsaNai
今は　（昔）と…　比べるならば，　今の　人は…　大変　早いし，
huniN　magisanu　huneRjatiN　siNsaNgutu…
船も　大きくて，　船酔いも　しないようになって,…
waQta　cje　uRgutu　hoRmunaR
私たちは　ほんとに　いいこと　しているよ。

収録 1971 年 m: 1930 年生, f: 1916 年生
［『全国方言資料』11 巻　沖縄県伊平屋村我喜屋（伊平屋島）］

宮古語では、COJADS で用例を検索すると（33）のように日本語共通語の終助詞「もの」に相当する用例が見られた。（33）は正月の話である。

(33)B: シューコーヤ　マーンティー…　ビジッティヤー　タツィ゜タツィ゜ドゥ
焼香は　本当に…　座っては　立ち　立ち
…ビキドゥヌキャーヤ　ウガナーリー…　ウガミー　ウタイ゜サイガ。

[9] この例は「お変わりなくて」と訳されているが、「肥えているものね」という意味だと注釈で解説されている。この例では日本語共通語の「もの」が使えるようにも見える。

…男たちは　集まって…　拝んでいたね。
C: ウンヌ　バーガマンドゥ　ンヤ　マーンティ　バカスィ゜　ムヌ。
その　頃に　もう　本当に　おかしい　もの。
バンタガ　ヤラビパダドゥマ…　マイ゜ガマティーマイ　ファーイタンバドゥ。
私たちが　子どもの頃などは…　米とも　食べられたから。

収録 1978 年 C: 明治生 60 歳以上女性
[COJADS　沖縄　平良市, 47_c_099, 14410, 8980.]

また、『全国方言資料』には（34）のような例が見られた。（34a）は「ね」と訳されているが、話し手に関する情報なので「長いことあっていないよ。」のような意味で mono'i が使われている可能性がある。

(34)a.
f: ’azagamama’i　ma’inici　gaNzoR　narra　siR　pataraki’joRramarmo
にいさんも　毎日　元気　で　働いていらっしゃいますか。
m: maRdado’joR　naga’ifu　miR’ja　miRN　mono’i
とてもだよ。　長いこと　あって　いない　ね。

収録 1969 年 m: 1900 年生, f: 1902 年生
［『全国方言資料』11 巻　沖縄県伊良部村長浜（伊良部島）］

b.
f: na’ujutu　puskarama’ü
何を　ほしいですか。
m: v’akaR…　’umu’i’juR　munuma’i　na’u　’junumunu　na’u
あなたの…　考えている　ものなら　何でも　いいですよ　何でも。

収録 1969 年 m: 1903 年生, f: 1908 年生
［『全国方言資料』11 巻　沖縄県平良市大神（宮古群島大神島）］

c.
m: mmaR　nnamatu　kuRra’i’ü…　na’uma’i　mme　’umuRkaneRNtu
かあちゃん，いま　来たよ。…　何でも　もう　思う通り
’asi　ma’ukizjukuR　’uR　sa’utaN　nasi　ks’juR
して　もうけ仕事を　ええ　相談　して　来たよ。
f: zja’u　munu
いい　ですね。

収録 1969 年 m: 1903 年生, f: 1908 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県平良市大神（宮古群島大神島）］

（34c）は「いいですね。」と訳されているが、「（それは）いい（よ）」「いいことだよ」というように自身の意見を述べているように見える。つまり、この munu は発話内容を聞き手に一方的に知らせる意味機能を持つと考えられる。宮古語に関しては（25e, f）にも文末で munu を使う例があったが、これらも「いいよ」「よろしいですよ」と解釈することができる。これらも話し手の意見を述べる文脈なので、munu が発話内容を聞き手に一方的に知らせる意味機能を持っていると取れる。（35）に再掲する。

(35)a. 【(25)e. 再掲】

m: sukatu　mme　'ureR　'junumunu

しかし　もう　それは　よろしい。

収録 1969 年 m: 1903 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県平良市大神（宮古群島大神島）］

b. 【(25)f. 再掲】

f: na'utitu　v'aR…　'umu'i　'utarapaR…

どうして　あなたは…　思って　いたならば,…

'antaka　mmata　'ü'taɴka'i　'jaraRma'i　kisi…　panas'u　'a'ütikaR

私たちの　母たち　父たちに　でも　来て…　話を　したら

kanu　'antaka　mmataR　'ü'ataR　sutataR　'junumunu　tiR

あの　私たちの　母たち　父たち　兄たちは　よろしい　と

'a'üta'ü　munu　v'aR　'aɴsi　kaɴsinu　paRja　neRta…

言った　のに,　あなたは　あんな　こんなの　ことが　なくて…

収録 1969 年 f: 1908 年生

［『全国方言資料』11 巻　沖縄県平良市大神（宮古群島大神島）］

内間（1984: 218-219）は、宮古語では形容詞語幹にmunuが付加して形容詞終止形を構成するとして、形容詞の終止形の末尾が「モノ」類と関係している可能性も否定できるものではないとしている。（35a, b）（=25e, f）や（34b, c）の「モノ」類の例は形容詞の終止形の末尾とも取れるが、終助詞として付加したものが活用語尾として定着した可能性はある。また、「モノ」類が終止形を構成しているのであれば、これが発話内容を聞き手に伝える意味機能を持っていると言えなくもない。用言の終止形で言い切る文には、話し手の知っている情報を聞き手に一方的に知らせる意味機能がある。

八重山語については、占部（2022: 197-198）が（36）のように「モノ」類が日本語共通

語の終助詞「もの」に訳せる例を挙げている。ここでは先行発話の理由を述べている。

(36)bai　baima　turunu　pandan　hautaro…
私　たちは　鳥の　足も　食べた…
turunu　pan　hoccyaa　undookaina　isupan　narungara　turunu　pan　hee
鳥の　足を　食べたら　運動会で　一番に　なるから　鳥の　足を　食べろ
turunu　pandan　hottaro
鳥の　足　食べたよ
uritu　gocisoo　yattaru　munu
それと　ごちそう　だった　もの（占部2022: 197-198）

そして与那国語では、「モノ」類が接続助詞として使われる用例は見当たらなかった。内間（1994: 274）は与那国語に「モノ」類の接続助詞の例は見出せないとしている。一方、終助詞の用法では『全国方言資料』と COJADS で（37）のような例が見られた。これらも日本語共通語の終助詞「もの」に相当し、先行発話の理由や根拠を述べている。

(37)a. m: uja　Ndaŋa　cigaraduR　biwaQt'aNdu
これは　あなたが　物心ついてから　お植えになったのか
canu　t'aR　bjaru　kidu　uja
物心つかない　ころに　植えた　木か,　これは。
f: aNŋa　ciRgara　asaŋadu　u　biwaQt'aru
わたしが　物心ついてから　おじいさんが,　お植えになった。
aŋa　agamit'iNt'ana　icici　muRcini　kamaNk'i　igja
わたしが　小さかったころ　5 つ　6 つの時に　向こうに　行くと
asaŋadu　buru　bi　anuja　tumarasi　aNbamidat'ana
おじいさんが　みんな　植えて　わたしは　泊らせて　遊ばせながら
asaŋa　biwaru　munu
おじいさんが　お植えになった　もの。
収録 1968 年 m: 1899 年生, f: 1896 年生
［『全国方言資料』11 巻　沖縄県与那国町祖納（与那国島）］
b. D: マた　ウヌ　メリけンくとゥか　アミリかガラヌ　ウンニヌ
また　その　メリケン粉とか　アメリカからの　そのような
ムギとゥか　ハイきュ　アたンデョー　ブール　ハイきュ。
麦とか　配給が　あったんだよ　全部　配給。

E: トーモロコシニヌ　ムヌンたヨ　ハインとゥ　キラニヌ　ムヌヨー
トウモロコシの　ようなものなどね　食べも　できない　ものね

収録 1979 年, E: 1919 年生女性

[COJADS　八重山郡与那国町, 47_e_009, 44680, 27420.]

このように、琉球諸語の「モノ」類には日本語共通語の終助詞「もの」と共通した意味用法があるが、終助詞の用法はより広いように見える。

4　琉球諸語における「モノ」類の用例分布

これまでに示した「モノ」類の用例分布を琉球諸語に属する言語ごとに整理すると、【表 1】のようになる。

表 1: 琉球諸語における「モノ」類の意味用法

	理由の接続助詞「から」	理由の接続助詞「のだから」	逆接の接続助詞「のに」	終助詞「もの」「よ」
奄美語	○	―	○	○
沖縄語	○	○	○	○
宮古語	―	―	○	○
八重山語	○	○	○	○
与那国語	―	―	―	○

例がない用法は非文法的とまでは言えないが、言語ごとに用例の分布に差が見られる。「モノ」類には、「コト」類と比べると少ないが日本語共通語の理由の接続助詞「から」に当たる用例がある。「から」と異なる振舞いをする日本語共通語の「のだから」に当たる例も見られ、琉球諸語では「から」と「のだから」に対応する形式の区別が明確にされていない可能性がある。その一方で「モノ」類には逆接の接続助詞「のに」に当たる用例も見られる。そして、「モノ」類の文末の例には日本語共通語の「もの」が使える、先行文脈の内容の理由や根拠を表すものがあるが、「もの」が使いにくく「よ」が自然となる、発話内容を聞き手に一方的に知らせる用例もある。

5　おわりに

本稿では談話資料と文法記述資料から琉球諸語の「モノ」類の用例を収集し、接続助

詞の用法と終助詞の用法を整理した。「モノ」類には日本語共通語の理由の接続助詞「から」や「のだから」に当たる用例があり、広い地域に見られた。その一方で逆接の接続助詞「のに」に当たる用例も見られるため、文脈によっては逆接にもなるものと思われる。そして、「モノ」類には終助詞「もの」や「よ」に当たる文末用法もあり、「モノ」類の終助詞の用法は日本語共通語の「もの」よりも広いと思われる。琉球諸語の「モノ」類の用法にはこのような多様性がある。今後は琉球諸語の「モノ」類について実際に話者に対して調査を行い、その意味用法の詳細を明らかにしていくことが望まれる。

参考文献

今尾ゆき子（1993）「「ノニ」の機能」『名古屋大学人文科学研究』22, pp. 75-84

井島正博（2016）「モノダ文の周辺」『日本語学論集』12, pp. 18-52

岩崎卓（1996）「ノダカラの統語的特徴について」『言語探究の領域　小泉保博士古稀記念論文集』上田功・砂川有里子・高見健一・野田尚史・蓮沼昭子編 pp. 69-77　大学書林

内間直仁（1984）『琉球方言文法の研究』笠間書院

内間直仁（1994）『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院

内間直仁・新垣公弥子（2000）『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房

内間直仁・野原三義編著（2006）『沖縄語辞典-那覇方言を中心に-』研究社

占部由子（2022）「南琉球八重山語石垣島白保方言の記述研究」九州大学大学院博士学位論文

カルリノ・サルバトーレ（2019）「北琉球沖縄語伊平屋方言の文法」一橋大学大学院博士学位論文

国立国語研究所編（1989）『方言文法全国地図』第 1 集　助詞編　財務省印刷局

国立国語研究所編（1999）『方言文法全国地図』第 4 集　表現法編 1　財務省印刷局

国立国語研究所編（2001）『沖縄語辞典』財務省印刷局

国立国語研究所編（2023）『日本語諸方言コーパス（COJADS）』中納言 Ver. 2023. 03

小原雄次郎（2016）「終助詞「もの」の意味と用法の派生」『言語学論集』20, pp. 65-76

白川博之（2009）「言いさし文」の研究』くろしお出版

白田理人（2013）「奄美語喜界島小野津方言の談話資料」『琉球列島の言語と文化: その記録と継承』田窪行則編, 第 3 部第 3 章　くろしお出版

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法I「のだ」の意味と用法』和泉書院

東條操（1953）「序説」『日本方言学』吉川弘文館

仲原穣（2007）「沖縄県那覇市首里方言の原因・理由表現」方言文法研究会編『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』

中本正智・中松竹雄（1984）「南島方言の概説」『講座方言学 10-沖縄・奄美地方の方言-』国書刊行会

中松竹雄（1984）「沖縄諸島（本島）の方言」『講座方言学 10-沖縄・奄美地方の方言-』国書刊行会

日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版

日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版

日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編（2000-2002）『日本国語大辞典』第 2 版　小学館
日本放送協会編（1999）『CD-ROM 版　全国方言資料』10 琉球編 1, 11 琉球編 2　NHK 出版
野田春美（1997）『の（だ）の機能』くろしお出版
花薗悟（2020）『初級沖縄語』研究社
原田登美（1997）「<「のに」文>の諸相: 特に後件情意文をめぐって」『言語と文化』1, pp. 52-62
原田登美（1998）「逆接の接続助詞-「ケド」「ノニ」「クセニ」-」『言語と文化』2, pp. 73-84
ペラール　トマ（2013）「日本列島の言語の多様性　琉球諸語を中心に」『琉球列島の言語と文化: その記録と継承』田窪行則編, 第 1 部第 4 章　くろしお出版
法政大学沖縄文化研究所編（1977）『琉球の方言　宮古大神島』東和社
前田直子（1995）「逆接を表わす「～のに」の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』5, pp. 99-123
松下光宏（2014）「コミュニケーションのための終助詞「もの」の用法」『日本語教育』159, pp. 30-45

（さかがみ　たけお　大学院人文社会系研究科　博士課程 1 年）